

催したが、その役割は果たせたと思われる。また、今回のAPPA及びその活動は、分極化し始めている斯界のトレンドの中で、アメリカ・カナダ、中・南米諸国を中心とした勢力と欧州連合を中心とした勢力に匹敵する第3の勢力として位置固めができたことも成果のひとつであろう。

会期中の延べ参加者数は日本以外12カ国23名、合計94名であった。このように盛会裏にシンポジウムを終了できたのも、日本学術振興会、山形県、山形市、日本藻類学会より補助金、後援



会場にて。左から Phang, Nelson, West, Karsten 博士。

を受けたこと、山形大学理学部、山形コンベンションビューロー、大風印刷、東急観光より物心両面で助力いただいたことに依る。ここに記して感謝申し上げる。

シンポジウムの準備などは準備委員会幹事として原慶明、川井浩史、河地正伸(日本代表APPA運営委員)、本村泰三(JSP英文誌編集委員長)、菱沼佑(JSP庶務幹事)、半沢直人(JSP会計幹事)、R. Jordan(山形大・理・地球環境)が、準備委員として横山亜紀子・近藤貴靖・Moat War Dai Naw・保科亮・土屋英夫・工藤創・梶川牧子・比嘉敦・谷藤吾朗・越智昭彦・宮丈仁・近野麻里・中場静江・植松隆行・佐々木政紀・佐藤潤・大泉春樹・佐藤崇史・山形大輔・木下佳子・佐藤恵(以上、山形大・理・生)、谷本舞子・大山緑(山形大・理・地球環境)、内田英伸(山形県企業振興公社)、長里千香子(北大・院)、山岸隆弘(東北大・院)、坂山俊英(東大・院)守屋真由美(筑波大・生物)が担当した。

(山形大・理)

## 寫田 智：アジア太平洋藻類学連合国際シンポジウム 「21世紀の藻類学に向けて」参加記

平成13年6月22-25日の4日間、上記シンポジウムは日本の最高気温40度8分の記録を持つ山形市の山形大学理学部において行われました。講演は23、24日で、内容は4部よりなり、1部は若手研究者によるオリジナルな研究成果に基づく講演、2部は中堅研究者による21世紀を展望する藻類学の総説的講演または先進的研究についての講演、3部はAPPA委員・役員の研究紹介講演、それに加えて4部は一般参加の研究者による展示発表でした。

Session 1: 大型藻類の分子系統について、3人の若手研究者が講演を行いました。私もこのセッションに入っており、拙い英語でアオサ・アオノリの分子系統学的解析についてお話しさせていただきました。質問は、かのJohn A. West氏からいただいたのですが、はじめ何を聞かれているのかさっぱりわかりませんでした。「もう一度お願いします」と言うと、ゆっくりと質問していただけてなんとか聞き取れ、無事に「Both!」と答えることができました。意志疎通のための英語力の必要

性を改めて痛感しました。

Session 2: 休憩を挟んで微細藻類の分子系統について4つの講演がありました。若手ナンバーワンで憧れの的である中山さん(筑波大)の講演はとてもきれいなPowerPointでのプレゼンテーションで、微細構造と分子系統学的解析とのデータを比較し、緑藻の系統進化についてお話してくださいました。このセッションでは最後に守屋さん(筑波大)がPowerPointでストラメノパイル生物の動画を2度披露してくださいました。私にとってなかなか縁がない生物群の動く姿を見ることができ、感動しました。

Session 3: 昼食後、藻類を扱った細胞生物学と細胞遺伝学についての講演が行われました。私と同じく山形大学理学部生物学科出身の長里さん(北大)の講演はとてもすばらしく、切れの良い英語と美しいスライドで聴衆を魅了していました。

Session 4: 休憩後、応用藻類学と題し4つの講演がありました。澤辺先生(北大)、水田先生(北大)、そしてChu氏(マレーシア国際医科大)の

講演はそれぞれ非常に興味深いお話しでしたが、なんといっても内村さん(科学技術振興事業団)の講演は面白いものでした。独特のフランス語訛りの英語で、現在最も注目されている海藻類である地中海産 *Caulerpa taxifolia* の駆除に関する研究でした。銅イオンが染み出すシート下で本種はもののみごとに全滅していました。今後どのように広範囲な実用が行われるのか興味を持たれます。

Session 5: 1日目最後のセッションは生理学・生化学に関する講演でした。片岡先生(東北大)の「*Vaucheria*の分枝が青色光で誘引される」という講演は、最近緑藻ミル属の仕事を始めた私にとって非常に興味深いものでした。*Vaucheria*での驚くべき発見は、微小管が核を動かしている事実でした。核を集合させ、枝を発生するために必要な遺伝子の発現と十分量の酵素群が生産され分枝を引き起こすそうです。緑藻ミル属はどのように小囊が形成されその小囊達がどのように積み重なることで丸(タマミル・コブシミル)や葉状(ヒラミル)や枝状(ミル・クロミル)になるのかといった今後の研究に大いに参考になりました。

懇親会は山形大学構内の厚生会館で行われました。サクランボや蕎麦など山形名物がずらりと並びとても盛況でした。本村先生にWest氏を紹介してもらい質問していただいたお礼をし、研究についての有意義なお話しが聞けました。原研究室の学生さんによる「花笠音頭」もすばらしかったです。

2日目は今年で94歳になられた中国のTseng先生のPlenary Lectureから始まりました。先生とはベトナムで行われた「有用海藻類の分類に関する国際研究会」でお会いして以来でしたが、綺麗な英語で将来の藻類養殖の展望についてお話しくださいましたが、とてもお元気そうでした。

Session 6: 中堅研究者による21世紀を展望する藻類学の総説的講演または先進的研究の講演です。河地さん(国環研)の講演はストラメノパイル生物群の新綱 *Pinguiphyceae* についてでした。いまだに網レベルの未知生物が存在する藻類の多様性に驚愕しました。このセッションの後、ポスターセッションへと移動しました。14題のポスターがならび活気あふれる討論がなされました。私が最も興味を惹かれたポスターは、私と山形大学理学部で同期の、しかも現在も同じ北大にいる塩野君のものでした。彼とは山形大入学時から毎週のように開かれた飲み会仲間でした。そのポス

ターは「中心型珪藻 *Thalassiosira trifulta* group 及び *Azpeitia nodulifera* groupにみられる北西太平洋における新第三紀の進化特性について」で、深海掘削船で海面下6,000mの海底から堆積物を採取し、そこに含まれる珪藻の量で約600万年前からの進化を探るというものでした。分子系統学的解析と違い、直接的な進化データが得られるこの分野は非常に面白味があると感じました。

Session 7: ここでは和文誌「藻類」の「藻類学最前線」でおなじみの石田さん(British Columbia大)が「核ゲノムにコードされているタンパク質が他のタンパク質と混同されることなく正しく葉緑体まで運ばれ、それがどのようにして葉緑体包膜を通り抜けて葉緑体内へと移送されるのか?」という問題についての講演をしてくださいました。クロララクニオン藻がご専門の石田さんらしく二次共生による葉緑体獲得機構の解明に繋がる非常に興味深いお話しでした。

Session 8: 本シンポジウム最後のセッションはAPPA委員・役員による研究講演で、Trono先生(Philippines大)、Ang Put先生(Chinese大、香岩)ならびにPhang先生(Malaya大)など世界を代表するアジアの重鎮が登場しました。学ぶべき事の多い講演ばかりでした。

中沢信午先生から始まる山形大学の藻類研究は、安部守先生、高橋永治先生へと引き継がれ現在では菱沼佑先生、原慶明先生がさらなる発展にお力を注いでいらっしゃいます。私を含めた山形大学出身の若手藻類研究者は、高橋さん(東北大)、長里さん、塩野君、吉川君(以上、北大)、岩滝君、坂山君(以上、東大)、山岸君(東北大)など多く、研究分野もバラエティーに富んでいます。それに加え現在山形大学在籍の学生さん達も近藤君、保科君、工藤君を筆頭に興味深いデータをどんどん出してきています。今後ますます「おもしろい藻類」を明らかにすべく共にごがんばりしましょう。

最後になりましたが、本シンポジウムの参加機会を与えてくださった原慶明先生を始めとする組織委員の皆様、本当にありがとうございます。さらに本シンポジウム期間中、受付、スライドならびに懇親会の準備をしてくださった多くの皆様にお礼申し上げます。